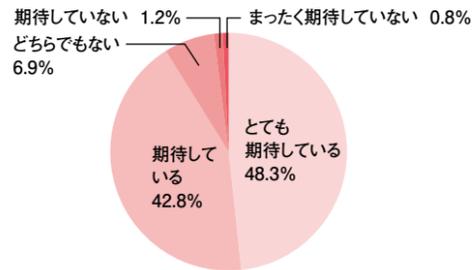


【図表5】ハイブリッド教育への教職員の期待は大きい～ハイブリッド教育への期待



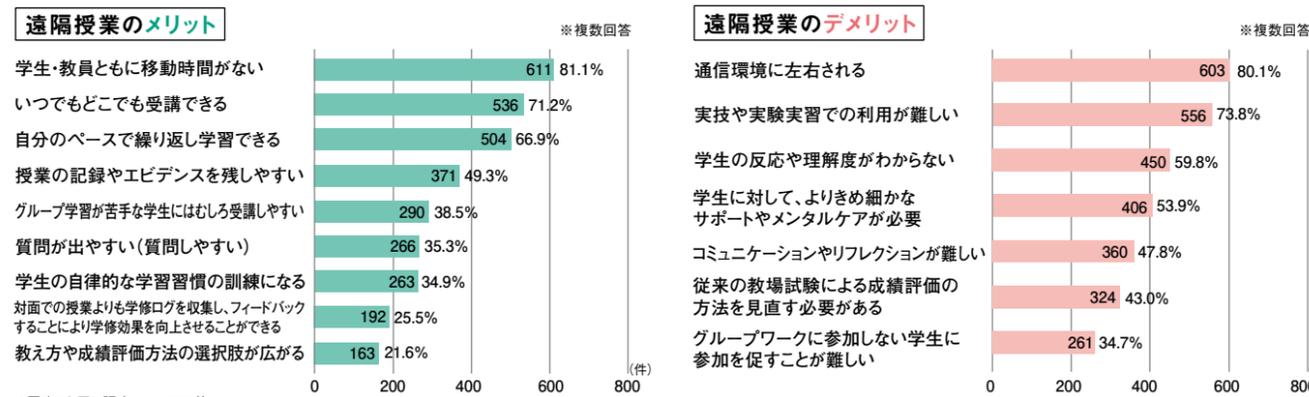
*国立情報学研究所主催のシンポジウム参加者の回答。N=909件
(大学・高専所属教職員84.1%、小中高所属教職員2.4%、その他一般企業等13.6%)
*国立情報学研究所(NII)「遠隔授業に関するアンケート調査の概要」(2020年)

【図表4】学生の大学教育への参加度は上がっている～THE世界大学ランキング日本版用学生調査経年比較

質問	平均スコア			
	2017年	2018年	2019年	2020年
①教員と交流する機会はどの程度あるか	6.39	6.56	6.68	6.52
②協働学習の機会はどの程度あるか	6.53	6.66	6.48	6.30
③クリティカルシンキングのスキルの成長が支援される機会がどの程度あるか	5.78	5.88	6.06	6.20
④学びの振り返り、学んだこと同士の結合を支援される機会がどの程度あるか	5.73	5.82	6.07	6.17
⑤学習内容の実社会への応用が支援される機会がどの程度あるか	6.57	6.90	6.60	6.63
⑥これまで受講した授業は、挑戦/やりがいのあるものだったか	6.61	6.83	7.01	7.14
⑦大学進学を検討する友人や家族に、自分の通う大学をどの程度勧めるか	6.46	6.34	6.41	6.54
⑧授業や大学運営の改善に関して学生が提案する機会があるか	6.52	6.61	6.62	6.80
⑨授業や大学運営に対する学生の提案がどのように実施されたか明らかにされているか	4.56	4.79	4.91	5.21
⑩大学の学部や学科、研究室で学ぶことは、どの程度自信を与えてくれているか	6.58	6.63	6.72	6.74
⑪大学の教員やスタッフ、学生のコミュニティの一部だと感じることがあるか	6.39	6.40	6.54	6.50

*「THE世界大学ランキング日本版」に伴う学生調査としてベネッセコーポレーションが実施。各質問に対して0～10点で回答する形式。毎年秋に実施。2020年の回答数は49603件

【図表6】遠隔授業は学生にとっての利点も多い～遠隔教育のメリット・デメリット



*図表5と同じ調査。N=753件

国立情報学研究所(NII)は2020年3月から、遠隔授業に関する情報の共有を目的にしたオンラインシンポジウム、*1「教育機関DXシンポ」を月2回程度開催している。大学、行政、企業などでオンライン化やコロナ対策に取り組む人材が、グッドプラクティスや最新の知見を報告。大学生や高校教員、海外大学の教員からの発表もあった。発表動画や資料は原則サイトで公開されており、FD、SDに有用なオンデマンド講座

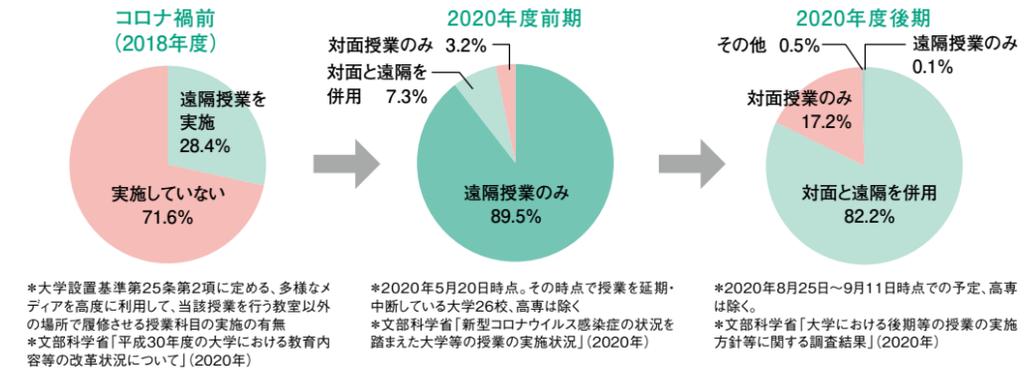
知見の共有が進み 教育効果への期待高まる

表れているのが【図表4】のTHE世界大学ランキング日本版用学生調査結果だ。THEチーフ・データ・オフィサーのダンカン・ロス氏は「⑨学生からの提案の実施結果公表の増加は興味深い」と述べる。また、③クリティカル・シンキングのスキル支援④学びを振り返る機会の提供が一貫して伸びていることも評価する一方、気になる点として「②協働学習の機会の低下」をあげている。国際交流同様コロナ禍の影響を受けやすいが、遠隔授業のほうがかむしる協働学習をしやすいという声もある。まさにDXの出番だろう。

この1年、半ば強制的に始まった遠隔授業の取り組みが今、新たな教育、学びを模索するフェーズへと変わりつつある。各大学の積極的な学生調査やLMSを通じた学習データの収集により、デジタル技術が彼らの何を変えるのかもわかりつつある。デメリットに対応しつつ、メリットをいかに生かしていくか。DXによって学修者本位の教育に転換するチャンスは、目の前にやってきている。

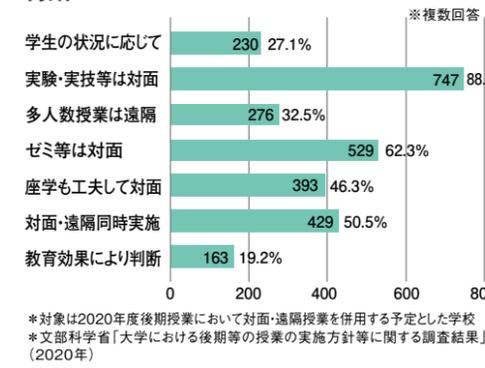
*4 正式名称は、「大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム」(2020年12月までは、「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」
https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/

【図表1】対面と遠隔を併用した授業形式へ～大学の遠隔授業の実施状況推移



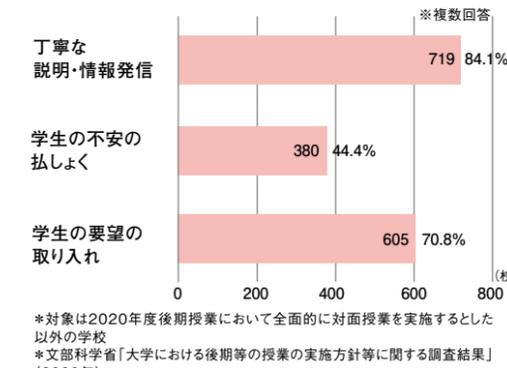
*大学設置基準第25条第2項に定める、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室以外の場所で履修させる授業科目の実施の有無
*文部科学省「平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について」(2020年)
*2020年5月20日時点。その時点で授業を延期・中断している大学26校、高専は除く
*文部科学省「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況」(2020年)
*2020年8月25日～9月11日時点での予定、高専は除く
*文部科学省「大学における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果」(2020年)

【図表3】学生の状況、教育効果も考えながら判断～対面・遠隔授業の併用の考え方について



*対象は2020年度後期授業において対面・遠隔授業を併用する予定とした学校
*文部科学省「大学における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果」(2020年)

【図表2】7割の大学が「学生の意見を反映」～遠隔授業の質の確保のために留意している事項



*対象は2020年度後期授業において全面的に対面授業を実施する以外の学校
*文部科学省「大学における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果」(2020年)

学生から見たDX

教育のDXは、誰よりも学生のためのものでなくてはならない。コロナ禍により進んだ教育のデジタル化を学修者本位の教育への起点にするには。

試行錯誤と学生からのフィードバックが学修者本位の教育への転換のきっかけに

学生の声が生かされた 授業の展開と工夫の動き

教育のDXの端緒となり得る例として、ここでは遠隔授業を取り上げたい。以前は実施率が3割にも満たなかったが、コロナ禍にあっても学びを止めない手段として、2020年度前期はほとんどの大学が実施した【図表1】。後期になって、対面授業のみに戻した大学は2割弱。8割強の大学が対面と遠隔を併用している。このコロナ禍での教育にあたって特筆すべきは、大学が学生の意見を聞きながら円滑な遠隔授業実施に全学的に取り組んでいることだ【図表2、3】。各大学ではこれまで授業アンケートは実施していても、結果の共有や教育改善は各教員任せの傾向にあった。それが今

回は全学に共有され、FDや学生サポートに生かされつつある。例えば山口大学では、学生の満足度がZoomや Moodleといったツールの種類ではなく、教材のつくり方や授業の進め方に依拠することを把握し、FDでテクニックを共有している。また成蹊大学は、授業内で学生同士が交流しにくいとの声から*1少人数でのセッション機能を追加し、さらに好評だった*2チャット機能について今度は対面授業への導入を検討している。遠隔授業は多くの大学や教員にとって初めての経験で勝手がわからない。学生が目の前にいないため様子も不明だ。しかし学びは止めたくない。その危機感から皆で学生の声を共有し、協力し合おうというマインドや動きが生まれたのではない。その結果が早くも

*1 Zoomの「ブレイクアウトルーム」機能。大人数でのミーティング(授業)時に、少人数グループに分かれて話し合いができる
*2 オンライン画面上でのテキストによる会話機能
*3 「教育リソース」「教育充実度」「教育成果」「国際性」の4つの指標のうち、「教育充実度」分野のデータソースとして利用